

浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿八日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別政令承認雜誌)第三五二号
昭和四十二年五月二十五日 印刷部(昭和四十二年六月一日発行)

第三十三卷

第六号

閑



閑

高橋良和

とも角も閑という字か恋
しい。

これをつくるために苦勞
しているが、人生はまな
らない。

閑を求めて閑を得ず、閑
をつくって、閑に弄ばれる。

人生は閑のひとときを得
るのにあくせくとして働い
ているようであろ。

ああ閑が欲しい。

— 目 次 —

表紙「雨」松濤達文画

ご本願力ということ

..... 佐藤良智 (2)

現代生活と仏教

..... 松濤弘道 (4)

名士訪問 高橋良和氏 (8)

御歌をいただく (11)

信づる自由を求めて亡命する

..... 佐藤密雄 (12)

石楠花の押花

..... 佐藤治子 (14)

お茶をおいしく 玉露を冷たく

..... 三浦純亨 (17)

歴史夜話 複雑な武士の信仰

..... 鈴木成元 (20)

新興教団探訪⑥ 話題を追って

..... 藤井正雄 (22)

読者の声 仏教と平和 (24)

連続話 みんなの法然さま・讃岐の国で

..... 高橋良和 (26)

元和偃武 キリシタン追放

..... 鶴田湛泉 (29)

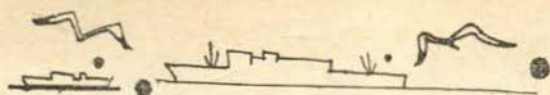
編集後記 (32)

夏

われはただほとけにいつかあふひぐさ
こころのつまにかけぬ日ぞなき

法然上人御歌





佐藤良智

だれでも願ひごとがあります。小さな願ひ。大きな願ひ。一人の人間にも数かぎりない願ひごとがございます。しかし、今、わたしの申します願ひとはそれと少し違います。永遠の生命でいらせますあみださまの願ひであります。それはすべての人を救いとうとうというねがいであります。とくには、苦しんでいる人、悩んでいる人、自信を失っている人、どうにもこうにもならない追いつめられた人、心にもない罪をしてしまって悩んでいる人、それから、みほとけさまからみれば人間のすべての人が凡夫と言つて自分の本当のねうちをだしきれないあわれな人なのです。このどんな人にも、勇氣と生きる力と自信とを与えずにはおかないという大きな願ひを持つて居られるのがあみださまでございます。こんな大きな願ひをもつた人間はありません。ですからあみださま、ほとけさまと申すのでございます。

あみださまは大きな願ひ、これを本願を申しますが、すべての人の願ひをかなえてやろうという大本願をお待ちになつて居られます方です。しかも、その願ひだけでなくその力をお持ちになつて居られます。この力ということが大層大切なことであります。願ひをいくら持たれても力をお持ちにならなければなんにもなりません。その御力のかたまりがあみださまなのでございます。願ひをかなえて下さると申しましたも私共の日常の小さな願ひを一つ一つかなえて下さるのではありません。大きく私共のいのち、ぐるみお救い下さいますのです。そうすれば日々の願ひはその中に入つてしまいますから小さな願ひも一つ一つかなえられてしまうことになります。

それではどんな力でどんなふうにお助け下さるのかと申しますと、なむあみだぶつとお念仏を申す方はどんな人でも救いとおつてやろうと申されるのでございます。お念仏を口で申すということは大層簡単なことなのですが、そのおこないのなかには、



ご本願ということ

からだも、こころもすべてあみださまにおまかせすることがふくまれているのでございます。口で申せば自然に心もそれにうごかされます、口で申せば自然に心もそれにうごかされますし、口で申せばからだもそれにつれてお念仏を申すにふさわしい活動的なからだになれるのでございます。

それですからお念仏を申すということは心もからだも、永遠の生命であり、無限のお光りであるあみださまにうちまかすということであります。

私の方はからっぽになり、ただ、ただ、みほとけさまだけがおはらたきになるのでございます。ご本願力のかたまりとなっておはらたきになるのでございます。

この偉大なお力はそのままおひかりにもなります。それですからつぎのようなおことばもございます。

「如来さまのお光明はどどこまでもおてらしになり、口になむあみだぶつと申すどんな人でも救いとお捨てになることはない。」

御承の方もあることと思いますが宗祖の法然上人のお歌にも仏さまのひかりを月の光にたとえて「月影の照さないところはながめる人のこにその光りは一層照らします」という意味のものがございます。み仏はだれかれとのへだてなくお救い下され、お力をかけて下され、お助け下さるのですが、お念仏を申して求めて行く人にこそ一層のお力をおかし下されるのでございます。私共はこの大きな御本願の力の船に乗りこむように命がけて一生懸命おすがり申さなければならぬと申します。それには素直なこころで静かに口になむあみだぶつと申させて頂くことであります。狂いじみた申しかたでなく、ごく自然に静かに申させて頂くのであります。そうすれば大きなみ命の力に乗せていただけるのであります。



現代生活と仏教

松 濤 弘 道

私に「現代生活と仏教」について、何か書いてほしいという御依頼であるが、実は其等について書くことを好まない。私にとっては未だ現代生活とはどういうものか、仏教とは何であるか、暗中摸索の状態であり、おこがましくも其等のことを、大上段から振るかぶって書く自信がないのである。私に書けることは、私自身が掴み取った只今の生活と、私自身の告白的仏教論である。この点御了承戴きたい。

さて、私は今、ひさしぶりに病床に臥している。思いがけ

ない病気に罹り、静かな一時ひとときを持っている。こうした時には、世間と謝絶しているので落着いて自分が眺められる。そして、今迄の自分の生活への感慨が走馬燈のように浮んでは消えて行く。

想い起せば、過去十数年の私の生活は、随分波乱に富んだものであった。忘れもしない昭和三十年の肌寒い年の暮、五年間は絶対に帰国してはならないと約束させられて、単身米国向けの横浜港碇泊のウイルソン号船上の人となった。豪華船とは名ばかりで、押し込まれた船底の三等船室は、毒々しいベンキの色と匂いと、油ぎった中国人や比島人の人垣ひがねで、正に奴隷船の地獄絵図そのものであっ

た。そして、出帆後の八日間時化^{しげ}の為ゆれにゆられて、ベッドにしがみついた惨^{あは}めな自分の姿は、人に見せられたものではなかった。こうして壮途^{さうと}についたものの、出発直前のけなげな勇姿はどこえやら、頭初から海外生活の夢は無残^{むざん}にもぶち破られたのである。

這道^{はうどう}の態で辿り着いたハワイの陽ざしは、あくまでまぶしく、明るかった。が、其処での生活は決して他の旅行者のように華^{はな}かで、なまやさしいものではなかった。とりもなおさず悩^{なや}まされたのは、一人ぼっちに投げ出された淋しさであった。どんなことがあっても、五年間は帰国を許されぬ者にとつては、丁度五年の刑期で監獄にぶち込まれた被告よりも質^たが悪かった。海を隔てて見知らぬ異邦人の中で、異国語をあやつり、一人長期間住むということは、それを實際経験した者でなければ、その辛さは到底分るまいと思う。ホームシックや孤独感などというシャレたものではない。何がなんでも生き抜かねばならぬという悲愴感^{ひさうかん}は筆舌に尽し難いものである。

辛さはそれだけにとどまらなかった。ハワイより留学を許されて、再び旅装をまとめて米大陸に旅立ち、目的地であるボストンの一歩手前のシラキューズ市に辿り着いた途

端に第二の苦境が待ち受けていた。当時持参した有金（小切手）を殆んど全部スラれてしまったのである。残されていたのは、幸いポケットにしのばせていた何がしかの小金だけであった。ハーヴァード大学に入学の手続は済ませたものの、一時は昼食代の持ち合せもなくそれからどうして生きて行こうかと、毎日焦燥と不安の日々を送っていた。運の悪いことは重なるもので、こうしたことで身も心も疲れはて、とうとう病^{やまい}に倒れて病院に担ぎ込まれてしまった。異国の空の下で金も無く、入院費を何時突きつけられるかとそればかり心配しながら、来る日も来る日も病床に臥^ふっている程辛いものはない。幸いスラれた小切手が、シラキューズの裏街に棄^すてられていたのを一市民が警察に届け出、入院中の私に急報されて危く九死に一生を得たおめであった。この時ほどお金の有難さを身をもって感じたことは無かった。

大学に入学してからが大変だった。という自慢話のようであるが、決してそんなケチな考えは毛頭無い、名にし負う米国屈指の名門校ハーヴァードで、他の学生と才を競うことに不足はない。しかし、何分語学力も、実力も、素地も無い一介の日本人学生が、他の白人学生を向うにまわ

して学ぶにはあまりにもハンデがありすぎた。しかし、ここに至っては一步も後退を許されない。人が三時間費して学習するものは、その二倍の時間をかけてもやり通さなければならぬ。幸い図書館は毎晩十二時迄開いており、書庫には私の研究室があって自由に使えた。日曜日はお手のものである。他の学生が休暇で遊んでいる時が、こっちのかせぎ時である。猛烈なファイトを燃して手当り次第読みまくった。だが結果はあまり良くなかった。日本的な発想が良くないのである。否むしろ私自身の発想が良くないといったほうが適切かも知れない。日本語では曲りなりにも通じた考えも英語では木端微塵に打碎れるのである。相手の枠の中で物を考えるというとは何と辛いことか。特に西洋的な思考法で私の思想を語る場合に、自分の心にボツかり大きな穴があくのである。この思想のズレを無理に埋めて私は卒業し、修士号を手に入れた。このわだかまりは今もなお、私の脳裏にこびりついて離れない。

○ ○ ○

私は次々に襲って来た此等精神的、物質的或は思想的な悩みを遍歴し、十数年ぶりで昨年の夏なつかしい故郷の土

を踏んだ。そして帰国後の今も尚且、此等の悩みは折り重なる様に私を訪れては去って行った。この運命を自分で勝手に選んで来たというものの、どうして自分だけがこんなに苦しみ悩まねばならないのかと人を怨み、自分を詛った。だがこの自分の苦悩を誰に訴えてよいか分らなかった。神や仏を求めて其処に救いを見出せる者は幸せである。歌や涙や酒や仕事で癒される者も幸せである。だがそれでも満足出来ない自分はどうしたらよいのか。胡摩かして生きることは易しい。他人や自分を目茶目茶にして生きることも易しい。だが自分は一体全体何が出来るというのか。浦敬一は明治時代に単身、新疆に旅立つに際し、漢口で孤独のあまり「仰ぎて天に訴ふるも天応えず、俯して地に訴ふるも地声無し」と自分の心境を詠んでいる。苦しさや悲しさに閉された者の人知れない幽咽や沈黙を一体誰が聞きとどけてくれるのだろうか。

ここで私の心に飛び込んで来た言葉は、無量寿経巻下の「独生独死、独去独来」である。この一節によって私は痛烈な一撃をくわされた。それも今にはじまることではなく、二千年も昔から「人間とは生まれる時も死ぬ時も、来るも去るもいつも一人ぼっちなんだよ」といっているではな

いか。私はこの言葉によって、心機一転した。今迄環境に甘え、人を貶し、自分を憐れんだことを恥じた。そして自分の望みが叶わぬと自暴自棄となり、揚句の果には人を責める自分を悔いた。自分には自分の、人には人の業があるのだ。それを誰かが勝手に改めることは出来ない。それをおしなべて自分の非は棚に上げ、その責は公て他人や環境に転嫁する自分の浅ましさにあきれた。人はあくまで人であり自分はあくまで自分なのである。その人にかかわり合い、当り散らせば散らす程、自分が損するだけなのである。この時に河合寛次郎氏の言葉「お前は助からないと思つていても助かつている」は私の肺腑を突いた。苦勞をただの苦勞に終らせてはいけないのだ。苦勞するばかりが能ではない。その苦勞に埋没するのではなく、そこから何を擷んでくるかに人間の貴さがあるのだ。

振り返ってみると、苦勞の連続であると考え、不幸の代名詞であると思つていた自分は何と恵まれていることか。今日まで無事に生きてこれただけでも幸せだと思わなければならぬ。それにもかかわらず不平不満をこぼすなどとはもつてのほかである。「艱難辛苦汝を玉にす」といわれているが、苦勞することによって結局は自分が得をし、

楽しさが増すのである。小林多喜二もその書簡集の中でいっている。「闇があるから光がある。そして闇から出てきた人こそ、一番本当に光の有難さが分るんだ。世の中は幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というのが片方にあるから、幸福ってものがある。そこを忘れないでくれ。だから俺たちが本当にいい生活をしようと思うなら、うんと苦しいことを味わつてみなければならぬ」。

今迄の私は人を救うどころか自分を救うことも出来ない惨めな存在であつた。しかしその自分が救われているといふのであるからやはり他の人々にもこの理を気付かせて上げる義務があると思つた。世の中には私以上に苦勞し、うちひしがれている者が沢山いる。彼等こそ私以上に救われなければならない存在である。ただそれを気付いていないだけの話なのである。

ふと此処でベンを置き、窓越しの庭を眺めると、そこには今を盛りと牡丹や椿や胡蝶花や躑躅が、見るもよく見ざるもよしと咲き誇り、眼を楽しませてくれている。私は今、ひとりぼっちではない。今日も一日生きていられる幸せをじっくり嚙んで味わっている。

(名)(士)(訪)(問)



中外日報取締役

高橋良和



里見八犬伝に感激する

「僕はね、小学校六年かの時にね、里見八犬伝を読んで感激したね。よし僕は児童向けに、こんな童話を書いてやろうとね。今も、その気持ちは変らんね」

大きな身体をゆすりながら、高橋先生は、童顔をほころばされた。全く先生は童顔である。中外日報に大学（昔の仏教専門学校）を出て入社し、記者として殆んど一生を捧げられただけあって、言う事はジャナリスト的洞察と、鋭い新聞人としての悪言がスパスパ飛び出す、目はいつも笑っている。

「あいつは、憎めん奴や」

こんな事をよく耳にする。その童顔の通り、児童文学への執念、児童教化への情熱が、燃え始めたのが、早くも小学校六年生の頃で

あったというから、やはりこの人は、児童教化の為に此の世に生れて来たようなものである。

その情熱が、今も燃え続けている。

子供の為の仕事がしたい

「先生の生涯の念願は何です」

「そりや、子供達の心の故里になるような児童文学が書きたいね。後世に残るようなものがね、それが書ければそれで何も欲はないね」いやはや、大変な欲である。果して、この先生は、何冊の本を書いたか数知れない。自分の背の高さ、（勿論この先生は余り背の高い方ではないが）に達する程の本を出しているが、未だ書き足りないらしい。しかも、将来に残るようなとは大変な情熱である。

「勿論、文学と言っても、仏教文学をだよ。

僕はね、宗教界のコンサルタントになりたいんだよ。そしてね、最後にはね、仏教児童教化吏を纏めたいね。これは中外をやめた後のいわば、最後の最後の仕事だね」

やはり、この人は仏教人であり、そして、

浄土宗人である。

誰しも、先生が、児童文学なり、児童教化の大家である事を知っていても、一般の浄土の読者はこの人が、正真正銘の浄土宗の僧侶である事は余り知られぬのではないだろうか。

明治四十四年生れという、已に先生は五十六才なのであるが奈良の田原本の本誓寺の長男として生れられた。しかし、長男でありながらこれは弟にゆすり、自分は社会人として活躍している。

「社会人として活躍するのにね、二足のわらじは駄目ですよ。寺もやり、社会人としても働く。そんなことを考えているから、ロクな僧侶がでさんのだね」

これが、先生の特論である。

俺は新聞人だ

「社会の人は、僕は児童教化の大家というがね、僕は新聞人だよ、しかも中外日報という宗教新聞の新聞人なんだよ」

中外日報を盛りたて、よい新聞にし、これ

を通じて宗教界に働きかける。これが今日の先生の第一事業であり、本職である。

「その点、無冠の帝王でもあり、つまらぬ社会のくず拾いなんだよ」

自嘲とも、不満とも誇りともつかぬこの言葉の中に先生らしい一本気の骨調がある。

「児童教化は、今は余技だよ」

その余技が此処までになっているのだから、やはり非凡な人の一人である。

中外も、戦後幾日か危険な線を歩いた事がある。涙骨社長無き後のことである。そんな時、例えば今東光氏などをつき出して、とも角、遮二無二に建て直しをした努力の甲斐あって、今日又隆盛を見ている。それはこの人の努力の賜である。

浄土合同の愚人

かつて、浄土宗は分裂して騒いだ事がある。その理由はとも角として決してそれはブラスにはなっていない。今尚その余塵はくすぶっている。しかし、今では、とも角合同して何かをやるうとしている。そして分裂の中

にあって、合同の必要を叫びつづけたのはこの人である。しかも表面的にはない。筆の力を通じてである。

中外日報には、有名な教界雑記欄がある。各宗の動きがよく分る。中外で一歩読まれる部分だろう。その中の浄土欄は勿論先生の筆である。

「あの頃はつらかつたね。何を書いていいやがられるからね。然し合同の必要だけは叫んだね」

新聞人だけに表も裏も知り尽している。それだけに分裂の無意義さを痛感していた。分裂十五年という先生の著書を見ればこの事がよく分る。表面だった合同の立役者ではなかったが、それだけにこの人の存在は合同劇の裏方として忘れてはならない存在だろう。

幅広い活動家

記者も、先生と付き合う事は随分永い。しかも、一体この人は何なのだろう。全くその幅広い活動はその主体さえはつきりしない。「主に外にどんな肩書きがありますか」

「そうだね、随分あるね。」

主なものだけでも、ざっと次のようなものである。

仏教音楽研究所運営委員

浄土宗ボーイスカウト連合協議会委員長

浄土宗保育協会常任理事

東山高等学校同窓会副会長

仏教大学建築委員

児童文学者協会々員

京都仏教クラブ事務局長

仏教大学教授

家政幼稚園々長

何が何んだかサッパリ分らん肩書きである。

「もう結構です」

と言いたい程である。何でもでき、何でもやり切る人である。決して政治家ではない。しかし何でもやる。いうならばアイディアマンなのである。浄土宗でも珍しい人材という外無い。大事にしたいものである。

真宗の浄土宗信仰は駄目

「一つ伺いますが、浄土信仰についての意見を」

「困ったね。しかし若し言わしてもらうならばね、今の浄土信仰の考え方がね、真宗的になっていないかね」

「いいいますと」

「絶対他力の念仏に化しつつあるという事だね。浄土宗の信仰は、いや念仏はだね、決してそんなものでないね。行が伴うんだね。その行が忘れられているんだよ」

「行というと、例えば戒律的なものが念仏生活の中に必要だともいう事です」

「いやそうではないね。念仏を数多く申せという事も行だしね、悪人だけの念仏ではないという事だね。声にも出し、懸命に念仏し努力する必要があるんだね。」

念仏申せば必ず往生出来る。誰でも出きる。悪人正機だ。こうした説き方が、余り強調されると、真宗の絶対他力になるという事

だ」

とも角、この問答だけでは、勿論先生が言わんとする事は尽されていないが、実践行の中の念仏生活というような先生の主張がその人格を通してニジミ出ている感じである。

「いやどうも、これでよいだろう。そんなにインタビュアーするなよ。人をインタビュアーした事は度々やったが、自分がされるのは始めてだから、もう許してくれよ」

そういったかと思うと、サッサと立って、振り返りもしないで

「さよなら」

と言って、京の街の中に消えて行かれた。全くこの人らしい去り方であとが、立ち去った後には、余りにも多くの問題をなげかけを行ったものである。

課題だらけだ。

アイディアマンで実践家。

全く驚いた人である。

(安居秀山)

御歌をいただく

われはただほとけにいつかあふひくさ

こころのつまにかけぬ日ぞなき

（勅修御伝第三十）

「あふひくさ（アオイグサ）」は葵草のこと
で、み仏に逢うの「逢う」と懸言葉になって
います。「こころのつま」は心の端というこ
と、「かけぬ」は思ひかけぬの意味です。

京都の賀茂祭は古くから夏の行事として有
名ですが、この日には勅使やそれに供奉する
人々はもとより、一般の参詣人もその衣冠や
頭髮や乗り物に葵の葉や蔓をつけて飾りまし
た。また家々の軒等にもこれをつけました。
そこで賀茂祭のことを葵祭ともいいます。

この祭りに葵草を物の端にかけると「こら
ら、次に心の端といったのですが、更に「逢
う」に应じて「妻」に通わせているわけだ
す。また「かけぬ」は葵や妻を受けた言葉と
なっています。そこで御歌の意味は

今日は賀茂祭であります。葵の葉や蔓が家
々の軒にかけられているばかりでなく、勅使

を初め一般の参詣人はその衣冠や頭髮に葵を
かけて飾っています。このように人々が葵を
物の端にかけるように、わが心の妻として深
く思ひをかけるように、ただ一筋にいつかは
み仏に逢えることを念願し、心の隅に思ひか
けぬ日とてありません。

ということになります。

この御歌は、法然上人が賀茂祭をご覧にな
って即興的に詠まれたものであります。世間
の人々がみな葵草を飾ったり身につけたりし
ているのを見て、平常から念願していること
即ちいつかは阿弥陀さまのみ許にゆけるとい
うご信仰が、そのまま口をついて出たように
お詠みになったものです。このことは念々不
捨のお念仏を唱えられているということを歌
にされたに外なりません。

上人が常に仰せられていた御詞に

「たとひ余事をいとなむとも、念仏を申し申
しこれをするとおもひをなせ。余事をしし、
念仏すとはおもふべからず」

の一句があります。この一句は、これだけ
ですべてがいつくざれていると思います。
何事をするにも、お念仏を唱えることが第一

のこととなっていなければならぬというので
すから、これ以上に何もつけ加えるべき言葉
がありません。まことに強いお詞であるとい
うべきです。

それならばもっと具体的にいつて、日常の
生活をどのように暮したらよいでしょうか。

このことについて禅勝房がお賀ねしたところ
上人は次のように教えられました。

「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様に
すぐべし。念仏のさまたげにならぬべくば、
なになりともよろづいとひすてて、これをと
どむべし。いはく、ひじりで申されずば、め
をもうけて申べし、妻をまうけて申されずば
ひじりにて申すべし」

出家するとかしないとか、妻帯するとかし
ないとかは、お念仏を唱えるための前提条件
ではないのです。そして上人は次のように言
葉をついで申されました。

「衣食住の三は、念仏の助業也。これすなは
ち自身安穩にして念仏往生とげんがために
は、何事もみな念仏の助業也」

生活の中心は、あくまでお念仏を唱えて極楽
往生をとげることにあります。（村瀬秀雄）

信ずる自由を求めて忘命す

スターリンの娘、スベトラナ夫人米国に入る

近頃の海外ニュースで、我々の興味をひいたものに、スターリンの娘さんであるスベトラナ・アシルエナ夫人が、初めに、スイスに居て、アメリカへ亡命したいと言っているというニュースがあったが、その時は、彼女の目的を果すのは困難のように報ぜられていた。日本の新聞の掲載した海外ニュースで、どの新聞も簡単なものばかりであった。

その内、四月の終り頃になってアメリカに亡命したというニュースがあり、彼女の欲する期間滞在が許されるという海外電が掲載された。日本人に余り興味のない話題であったが、然し一部の人には関心が持たれて、私も多少の懸念をもった。

スターリンは、第二次世界戦争に、ヒットラーの侵入に抵抗して、ついにヒットラーをして往年のナポレオンの轍

を踏ませた、ソ連の救世主的英雄であった。然し彼の死後の、ソ連の政治思想の転換は、スターリン崇拜の否定となつて近年に及んでいる。そして、此頃のソ連ではまた、スターリンの功績も再認がなされつつあるというのが、私共のスターリンに関する少ない知識であった。

丁度、隣の共産中国に猛烈な毛沢東崇拜が興っているの
で、その意味で、かつてのソ連の個人崇拜の対象であった
スターリンと今の毛沢東を対比して見たい気持の日本人も
多いと考えられる。

そのスターリンの娘さんのことなので、もっと様子を知
り度いと考えていたところ、四月二十二日のニューヨーク
タイムスに、この娘さんの特集記事が三頁に亘つてあるの
を、近頃入手した。それを読むと、彼女は神と共に暮す宗

教の自由を求めて亡命したと述べているので、その部分を記すことにした。

彼女は年輩で、二十一才の医学生長の長男と十五才の娘との母であるが、二人は二人の夫の子とされるから、二度結婚したことになる。そして三度目に印度の共産主義者であるブッヂエシ・シングと結婚した。但し、ソ連政府は外人との結婚を認めないのと、自分のスターリンという姓が一種の国家の資産（ステートプロパティ）と考えられたので（夫の名に改名出来なかったで）結婚手続が出来なかったが、この夫は昨年十月三十一日にモスクワで死んだ。そこで彼女は、夫の故国インドへ遺骨（灰とある）を持って昨年十二月二十日に行ったのである。その時は、一カ月以内に二人の子供の所へ、販る考えであったのが、スイス滞在中にアメリカへ亡命することを決心した。

彼女が言うには、「子供の時から共産主義を教えられ、それを信じた」。然し年を取り経験をつむと共に自分達のことを考えるに至った。そして「宗教は私の運命を変えた」という。「自分は家族と共に神について語ることを出来ないとこへ連れて行かれた。然し、自分が一人前になると、人間の心に神の存在をなくすることは不可能だという

ことを発見した。そこで私は、私には誰れの助けも説教もなくなった、いう決断に達した。然しその時に、大きな変化が私に生じた。共産主義のドクマが私から意味を失った。私は、世界のあらゆるところにいる人々の知性の力を信ずる」と、また神の前には共産主義者も資本主義者もない。闘争や不必要な流血の代りに、人々は協力してヒューマニティの前進に働かねばならないと彼女は主張している。また彼女は、人の家庭がどこにあつても、それは自由を感じるものでなくてはならないことも述べている。彼女の目下の目的は、その半生記事を記した手記の出版であるが、それはタイムスの解説によると、文学的に立派な作品であるとされている。彼女は、旅行者のビザでアメリカに來たので、正式には六月の滞在だが、彼女の望むだけいてもよいことになるかとされている。取敢えず、代理人の弁護士によって出版がすすめられている。彼女の子供達は、彼女がスイスを去る時に電話を受けたというが、勿論、亡命するとは語れなかったようである。その子供について彼女は、私は子供達が充分に、私と私の行動を理解してくれることを知っている。彼等は我がソ連の新時代に属するが新時代のソ連は古い理念で誤られないことを望む（佐藤密雄）

石楠花の押花



佐藤治子

或る日、室生寺へ行かれた友人が紹介した旅館から預かったと紙包と一通の手紙を届けに来られた。手紙の中にやわらかい白い紙に何か包んである。そつと開いてみると未だ色あざやかなピンクの石楠花の押花であった。もつて来られたその人も中に何が入っているかそつと開く手をもつめておられたが、それをみて目を丸くして「まあ」というのみである。

この一葉の押花を送ってくれた人は女人高野と別名を持つ室生寺の門前の古い橋本屋という旅館の奥さんである。

一昨年の秋、潮会（私の寺の婦人会）の婦

人方二十六名で室生寺から飛鳥地方を参拝見学の旅に出かけた。只の旅行団とは目的もちがい、予備知識もそなえてから旅立つ事故、觀察する点も自ずとちがっている。この橋本屋さんのかざらぬ素朴な、しかもあたたかい接待に、皆心をあたためられたのである。その後再び訪れる会員達、或は紹介をして昼食をとる方もあり、いつも感謝されるのである。

私は休みを利用して奈良へ行きたいという次男夫婦が室生へも行きたいという事から急に思い立ち石楠花の咲く室生へと再びここを訪ねる機会に恵まれたのである。

室生寺の門前の室生川にかかった橋に面し

た部屋を私共の為に用意して待っていてくれた。その部屋で、カタカタと橋を歩く足音に深い山中での一夜はあけた。今朱のらん間に朝日が照っている。

原種用紙をひざにのせたまま、私は川のせせらぎに耳をすまし静かな山里の朝を心ゆくまで味わっていた。

急ピッチに人達のすさんで行く昨今の世情に一昨年私はこの宿の御主人夫妻に「何卒このあたたかい思いやり、接待ぶりをもちつづけて下さい」と礼状をかいた。私にかかざるを得ない気持にまでしてくれた接待であった。

未だ暮れるに間のある一刻を若い二人は奥の院まで登って来た足と棒にして戻って来た。「ここのお料理はおいしいのよ」と楽しませておいた通り、山芋、百合の根そして室生川でとれるという川魚料理、山海の珍味でなく、山と川と野の珍味を味わわせてくれるこの宿のお料理に私は「板前さんにおいしいと伝えて下さい」というと「この奥さんが料理しはります」との事、又々おどろき、そしてなる程心のこもったお料理が出来るわけとなつたのである。

ところのおいしい事。おもちのようにくがある。お手伝いの人達も話しぶり、物ごしがおだやかで年の若い主婦をよくたてて手伝っているのを見るにつけこの里の人達のやさしい純朴さに心うたれる。

きりたった山々の溪谷に建立された室生寺は都じんを流し、考え事をするに絶好の場所である。

私は寺院を参拝する機会を得られるとやはり参拝、見学の人達の多く見える同じ立場にある寺に働く者として、各寺院の境内の手入れ、説明する人達の事をつぶさに見学して来

るのは当然の事である。私の寺で働く男子の場合は一定の職業を停年退職している人が多し。ここ室生寺の各お堂には男女とも老人が殆んどといつてよい位である。あの苦むす石の階段をよく毎日登って庭をはいたり受もちのお堂の説明をしたりしている様子に感心をする。

石楠花は例年より雨が多かつたせいかよくなかつたといわれた。すでに盛りを過ぎていた。けれどこの境内に「スワウ」が多いのにおどろく。有名な塔はいわずもがな、お堂御仏像すべて国宝国宝である。秋よし、春よし、又五月雨の室生寺又よいか。

皇太子殿下御手植えの育ちにくいメタセコイヤの木が無事に育っている。美しい葉の色。私は折角頂いたのに枯れてしまったその木を思いメタセコイヤと歓声をあげた。

ここへ来る道すがら摩崖仏を拝む。この事をも少しよく知りたく事務所へ立寄つてみる。「これは大野寺に属するもの。大野寺へ行つてきてごらん下さい」といわれた。この事務所にも老人ばかりおられた。私は「お堂に勤めておられる方々お元気ですな」とい

うと、四十年もつとめているという中村さんが「あなた、ここはお堂も国宝、仏様も国宝」といかけたので「もう説明は何つて来ました」といおうとすると「説明者も国宝」といい切つて立つて行つた。私は思わず笑つてしまった。皆八十才をこえていますとき、村の老人達なのだとなつた。

いよいよここを立つという時、宿の奥さんが山芋のおみやげを下さつた。そして椎だけも「夏まで保存するのですよ」といわれる。

丸い形をした珍らしいおいものである。そしてお手伝いさんらと手をふつて見送つてくれたのである。バスも「臨時」とかいてあるのがたまに通る位廻りくねる山道を川に沿つて奥深く入った村の事故、おいしいお料理の材料は季節の物以外は地中に保存したりかんそうしたものを手ざよく利用しておるのである。

話は元へ戻るが押花を届けてくれた人は実は外人である。名の知れた土地の見物も当然の事から、日本をもっとよく知るには人のあまり訪れぬ所、そして裏街道にもっと日本の味わうべき所がある事を知らせたい。私は日

本語をかき、その意味を英文に直しナムバーをうって、近鉄の室生大野駅へとの道順、或は日本旅館でおたがい不自由せぬよう、お風呂は？ 不浄は？ といった事までかいてもたせて上げた。婦えりには近くの病院へ立寄り見學し、手ぶりで話をして来たという。最近御礼状が舞いこんだ。事務長と婦長さんの名刺も同封し、感謝状を日本語にしておして送って頂きたいとの申出であつて、四人の外国婦人達は楽しい、そして珍らしい旅行をして戻つたのであつた。宿の方にきくと「奥様の連絡があつてから外国人が来るというので村の人達が皆でみに来たのですよ」と話をされびっくりしてしまつた。

話かわつて私は室生へ行く前に近くの長谷寺へ参拝の時爽に不愉快な思いをした。丁度ボタンの盛り、そして父からは是非参拝して来るようにといわれた次男は小さな車をどこへ駐車しようかと探しつつ古い町並みを徐行して行くと、広い駐車場があつてここより行きますせんという。けれど他の車が次々と走って行くのもう少し行つてみようかと徐行しつつ登ると、田舎のおばさんという態の人がこ

こよりは車は走れせんというのでそこへ車を止めた。登り坂の町並みをそろそろ歩いて行く人達をみて皆そう信じ車を降りて行く事が分つた。暫くすると二カ所駐車場があり、一、二台より止つていない。

潮会で来た時はバスが門の下まで行き駐車出来たのに。でもほとんどの時季なのでそうしたのかも知れない。老も若きもといいたいが老人が多く、中には杖をひく一団の老人達も歩っている。その人等の姿に私自身を上げまし、ようやく門の下へついた。

何と駐車場があるではないか！ もうふんがいで一杯である。「もう石段を登る力がないうこで休みまっさ。貴女、おさい銭あげて来ておくれやすと何人かの婦人達が落伍してしまつてゐる。前に参詣して一番にあの三百何段かを登つた私もぼただけ眺める事にして下で待つ事にした。歴史の古いあの青葉に包まれた山々にかこまれて由緒ある長谷寺詣でも不親切。不心得な悪徳業者の人達のおかげで三人でひどいひどいといかりをこめて帰途についた。室生の帰途、近くを通ると又それにひつかかつて駐車場へのりこもうとして

いる事を見て、未だ未だ行けますよと声をはり上げていたい位であつた。その車はもうすでに第一陣の駐車場勧誘にひつかかつてしまつてゐた。初瀬とは私の俳号で高浜虚子先生が長谷に住む私に同じ長谷の土地の名初瀬をとつてつけて下さつただけに心ない人達の事が余計口惜しく思うのである。行く先々色々な事をみ、聞きして情ないと思う世状である。観光者が土地の人達を悪がしこくするのではなからうか。

室生の人達よ。何卒いつでも心優しい人達であつて下さい。と願はざるを得ない。

石楠花の押花は私の栴色あせつつもその室生の心の香は失はれず、おかれているのである。



独り茶を啜ると幽、五客を雅、それ以上は自然に雅趣に乏しく普茶と云い、布施茶とも申します。近頃の茶は全く布施茶と申して差支えないほどの大寄せの茶会で、全くのショーであると思います。また、これはこれなりによさはございますが、たまさか山に乳泉（湧き出する水）を求められて、独り楽しんで如何でございましょうか。

季白の詩の

「山中に幽人と対酌して」

兩人対酌すれば山花開く一杯一杯又一杯これはお酒ですが、この時の幽人とは（同志ではなく）

自然を相手に独り楽しんでゐるのではなからうかと、私は思います。

我れ酔うて寝むらんと欲すれば君はしばしば去れ

これは寝むくなれば、自然の美も自ら目にはうつらず

明朝意あれば琴をいだいて来たととは「流水百琴」と申しますように、山の水

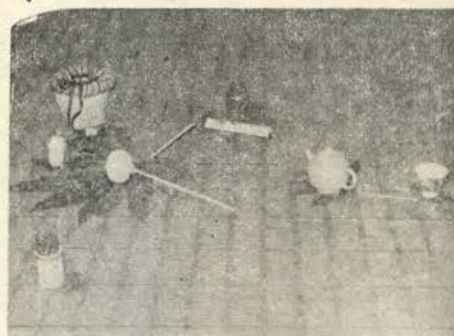
お茶をおいしく

—その6—

玉露を冷たく

黄檗幽茗流家元

三 浦 純 亭



のせせらぎは季白も自然の抱く琴にたとた、季白の相手はあくまでも大自然を友としている。

と、私は私なりに解釈しつつけております。それで、心疲れば山を歩き、大自然に抱かれ、清らかな水を掬い、玉露を入れて、自然と語る自分の姿は、南面のそれと同じく独り悦に入ることしばしばあります。

蘇東波は

「溪声広長古山色清浄心」

と、申しております。

「川のせせらぎは仏の声（説法）山の姿はそのままだ仏心」と、申して、自然の無言の動きの中に、自分なりに悟り読まれております。

世の中が騒がしければ、騒がしいだけに、独りふらりと野行袋（茶を仕組んである袋）を提げて、（自然）と語りに行く。水とたわむれ、石と語り、野草のやさしい心にふれあいます。この喜びは何人にも許された最高の贅沢さと、私は思います。皆

様もお心がお疲れになりましたら、手製の袋に茶具を仕組み、山に水を尋ねて、一度遊ばしてみても如何でございましょう。自然は何かを語り返してくれまう。

水淹の入れ方

玉露大さじ山盛一杯。泡瓶（又は宝瓶と書いてもよろしく、茶は宝ですから、宝をおいしく入れる器故）

水は微温湯より葉の開きが遅いため、間はそれだけ長いことになります。こんなとき、無我の境地にもなれます。

茶卓が携帯に重ければ、山に散っている落葉でも結構、これもなかなかすがたい風情がございます。野外だからと申して、茶卓のないお茶は趣きがございせんもの茶盆がなければ、木の枝を何本か組み合わせて茶棚を作りましょう。食足りて礼節を知るでなしに、食足らざるも礼節を知っていただきますために……。

全く自然を友として湧き出する水で玉露

を入れ、そのしたたる味は筆舌には表わせません。

古人は（古えの茶の人）季白とそれと同じ心にしてか、独り武蔵の綾瀬川に水を求めて転がっているねむの木を棚に磁碗（茶碗）を並べ、清らかな流れの水（昔は飲料に適した水とききます。）をすくい、独り悦に入り、

「ねむの木の寝むたくあらばおとしに目覚し語れ茶飲み友達」と、言いのこしております。

家庭で遊ばす水淹は、大さじ山盛一杯の茶を先ず泡瓶に入れ、水で冷やした水を掬い入れ、更に涼感を感じていただきますために、小さく割った水を（冷蔵庫のでも結構）カラコロと音を立てて、杓子でもスプーンでもよろしゅうございますから、その一片を掬い泡瓶の中に落とします。この一片の水をすくう時の氷りと氷りとのおれ合う音は、真心の音にさへきこえます。氷のとけるまでに、冷えた西瓜をいただきます

いように切り、種を抜き、器に入れ用意するまでに茶の葉が開きます。

これはなんとも申せぬ美味な日本人ならではの夏の飲み物でございましょう。不安と焦燥にかけられる現代人に茶の「醒醐味」に人生を遠観していただきたいものです。茶が今日国民保険飲料として不可欠の役割を持つ大きな理由は、既に千年の昔に明らかにされ、精神的にも物質的にも日常生活になくてはならぬ活力ともなり、簡素にして風韻ある生活に、悟りの道をひらかせてくれるものが、茶の妙味でございましょう。

この夏は是非「水淹」「氷淹」をお試し遊ばして。お客様におすすめ致します時の、最も簡単な水淹の入れ方は、泡瓶の中に氷三片を入れた泡瓶に蓋をして、そのまま瓶台にのせておすすめします。語らいのうちに氷の解けるのを待ち、御客様御自身で磁碗に一滴一滴ずつづき、楽しみながら味わっていただきます。きつとお喜び

ただけですと存じます。

水淹・水淹にあいますお菓子、先程の西瓜又はきんぎよく糖などを冷たくしておすめいたしましょう。

御家庭で水淹を水道の水でお入れになる場合の水のとり方

一、水を汲み置く。(消毒用のカルキの臭を消すため)

一、それを沸かし、葉罐ごと水の中に入れてさます。

一、更に冷たくするために冷蔵庫に入れるか、氷塊を葉罐の中に入れる。

上手な入れ方

一、五人分として大さじ山盛一杯

一、先ず泡瓶に入れ、大さじ三杯の水を端から静かにそそぎ入れる。二、三分置き、自分の茶碗に色を試し、一往復するか、それでも充分と思えぬ時は三往復、又はそれ以上でもよろしゅうございま

す。(茶は水にては開きが遅いためになす一つのコツです)

一、最後の一滴がおいしく、如何なる場合もしほり切ることをお忘れなく。

一、二煎目は大さじ三杯の水を茶の葉全体に水がしたるように入れる。そして又同じようにつぎ分ける。

一、水淹・水淹は三煎入れてもおいしく同じように味わえます。

味わい方

一、舌の上に転がすようにして味わいます。

一、一煎目は茶の香りと味をたのしみ、二煎目からお菓子を上がって下さいませ。初めからお菓子をいただきますと、茶の味はわかりません。

* * *

—ある質問—

最近振替貯金の利用が多いと聞いておりますが、私の寺も檀家が地方に分散している為不便を感じております。

この際振替口座を開設すれば何かと便利と思いますので、振替貯金の加入方法を詳しくお教え下さい。(秋田一住職より)

答 え

従来指替貯金は郵便振替と改称されました。郵便振替加入の手続きは全国何れの郵便局窓口でも受付けます。申込書二枚(同種のもの)に法人と個人の二種ありますが、何れかで申請するのですが、夫々の戸籍謄本又は抄本が一通必要です。

最近郵便振替小切手口座を開くことができます。保険料・光熱費・物品の購入等の支払いにも便利ですが、この場合、小切手を使用したい旨を申出れば申込書を貰えます。

開設料金は五〇円です。相手の方が外国に口座があればお互いに利用することもできます。大いに活用して下さい。

複雑な 武士の信仰



鈴木 成 元

昔から信仰問題ほど複雑なものはなく、またこの言葉ほど複雑な意味をもっているものも少ない。信仰には妄信もあれば解信もあるし、上べだけの形式的なものもある。そしてその信ずる対象も、一仏に限るものもあれば多仏に対するものもある。全くいろいろでつ

かみどころがない。

上井覚兼は九州の大名島津氏の家臣で、武芸一般に通じた戦国時代の武将である。彼は

田舎武士とは思われないほど幅の広い教養を身につけ、茶の湯・お花や香道までたしなむインテリであった。幸い天正十一年（一六三三）から書き残された『上井覚兼日記』があり、

これを通してよくその人柄がしのばれる。そのうち特に興味をひくのは彼の信仰である。

覚兼の決っている宗教行事は沢山ある。朔日と十五日には看經読経、三日は毘沙門天、八日と十二日には薬師如来、十三日には虚空藏菩薩、十八日には観音菩薩、二十三日には月待ちの読経、二十四日には地藏菩薩、二十五日には天満天神、二十八日には荒神に参詣するという有様であった。このほか覚兼は法

華宗や禪宗にも精通しており、日は定めてないが、多くの祈念祈禱を行っている。このように覚兼は三日に一度のわりで何処かに参詣したり、看經読経をしている。しかしこの日記は覚兼の後半生、つまり晩年に近いところから記述したもので、天正十一年以前の行動は明らかでない。けれどもこのような宗教心が

急にできたとは思えられないので、以前からの習慣によったものと考えても不自然ではない。

それにしても覚兼は、これらの諸仏諸神を全く平等に扱い、これだけは格別というものが見当らない。現在でも浄土宗に属している人が薬師様にお詣りしたり、八幡様にお詣りする人は数多である。だから覚兼にしても変りはないといえるかもしれない。しかし平均にしても三日に一度はどこかに参詣するという有様には驚くはかはない。覚兼の信仰は地藏様であろうが観音様であろうが、手当り次第で何でもよい。要するに戦国時代に行われていたあらゆる信仰に興味を持ち、進んで行っていたに過ぎない。そして年々その信仰度は深まって行った。

それにしても面白いことは、諸仏諸神に対する参詣や祈禱の状態である。普通のとときは代理人を遣わしてすまさせ、覚兼自身が出向くことはなかった。ところが心配事があると自分で出向く。ことに出陣が近づいたりすると、寒中でも早起きして行水し、一生懸命に祈念するのが常である。こうしてみると覚兼

の信仰の中には現世利益が大きな位置を占めていたことがわかる。彼は仏教学や宗教学の教理をマスターして、その教義の勝者によって分別し、納得して信仰心を起したものではない。諸仏諸神の加護によって、強引に利益をえようとしたのである。昔からある素朴な信仰形態である。

覚兼はなぜこのように多種類の信仰をもったのであろうか。簡単に習慣とだけ決めつけられるものではない。そこには戦国時代という彼の生きた時代が大きな影響力をもつ、覚

兼は島津氏の家老として重い地位にあり、いつも大將格として戦場に出る身であった。武士が戦に出るときには、当然死は覚悟の上である。相手を殺すか自分が殺されるかである。だから当時の武士は「武士道とは死ぬことと見つけたり」などという甘いものではなかった。いかに死んでゆくか、どうすれば死際が立派であるかが問題であった。しかしそうかといって自分から進んで死のうと思うものはない。できれば戦争に勝ち、その上自分も健在でありたいと思うに相違ない。いやた

とえ敗戦になっても命の助かることを願うのが人間の本能であらう。生死は運の問題と片づけてしまえばそれまでではあるが、死に直面すれば、神仏の加護を仰ぐのも当然で、彼の信仰は環境がそうさせたとみるべきであらう。覚兼の祈禱の中には、病気をなおすために行つた場合もある。けれどもこれと究極の目的はやはり生死の問題と結びつく。人生にとって生死ほど大問題はない。

覚兼の信仰は晩年ほど深くなったが、それが最後まで持続したわけではない。やがて戦乱が治り、健康が恢復すると、自分は参詣をしないで代理の人を諸所に派遣してすますようになる。ここに覚兼の人間性がよく現われているとみてよい。これは何も覚兼一人だけに限られたものではない。普通一般人の信仰というものはこの種のものであろう。最近の仏教界では、復古思想が強まって往時の隆盛時代を夢見て歎く人々が多い。骨殖そのものである。政治も経済も文化も芸能も一緒にあった時代と、それらが分科して発達してきた今日との間には、永い間の時間が流れていることを忘れてはならない。



長久手合戦図屏風部分

話題をおつて

新宗連地方組織の

拡充と政治活動――

藤井正雄

新宗連中国総支部の結成

四月三十日の中国新聞と新宗教新聞五月五日号は、新宗連の第八番目の地方組織である中国総支部がさる四月二十四日に結成されたことを報じている。この日には、岡山広島山口鳥取島根の五県所在の加盟教団十三一仏所護会教団、円応教、解脱会、神ながら教、妙智会教団、PL教団、立正佼成会、誠心明生会、四大道、神道天行居、天壤教、天恩教、善隣会一の本部、教会支部など八九団体、代表三百人が参集して結成式典を盛大に挙行したと伝えている。

新宗連の成立

新宗連（新日本宗教団体連合会）の結成

が、昭和二十六年秋にさかのぼることは、すでに本誌正月号で触れたが、全日仏、神社本庁、日本基督教連合会、教派神道連合会などの宗教団体の連合組織と異なり、教義、信仰対象、信条などに共通点をもたない連合組織で、設立当初は内部的に崩壊するであろうという観測がなされていた。昭和二十六年四月の宗教法人法の成立から、認承手続を円滑化するための連絡機関の設立が望まれ、同年八月にPL教団、立正佼成会、世界救世教、生長の家教団、惟神会の五教団による「新宗教団体連合会」の結成と、一方、三五教、修養団、神誠会、天真道、惟神会、生長の家教団などの指導者による設立準備会とが平行してな

されて「新宗連」が結成されたのであった。

設立当時は二十四教団であったが、一年後には六十教団となり、現在は八十二教団―加盟予定二教団を入れると八十四教団―の組織体となつて増大している。設立当初の観測からみると驚嘆すべき発展ぶりである。

末端組織の拡充

現在、新宗連は「宗教協力」「信教の自由」「政教分離」「国民皆信仰」の四つのスローガンをかけている。中国総支部結成のときの△決意宣言△は、

決意宣言

宗教の目的は人類愛に根ざした平和世界の建設にあります。

これは宗教者が生涯をかけて果さなければならぬ使命であります。

われわれの所属する教派、教団は、それぞれの形や姿は違ひましても、心は一つであり、その目的とするところは、以上の一点につきると思います。

その故に、われわれは人と人との調和を念願して、明るく住みよい社会を建設しよう、すべての努力を傾けているのであり

ます。

新宗連は、あらゆる宗教団体が相互に尊重し合い、相互理解の上に立って、独善という排他的な垣根を取り払って、親しく結び合い、協力し合って、反道徳的な対抗を追放し、真に、人類愛にみちた理想郷を建設することに生命をかけております。

したがって、国民の皆が、毎日の生活の中で信仰することの喜びを味わいながら、正しい信仰を身につけたときこそ、新宗連が精魂を傾けて折り続けている平和の念願が叶ったときであります。

この結成式典に当り、われわれ加盟団体は、今後一段と相互の提携を強くして、本来の目的達成に向って、たゆまない努力を払うことを誓うものであります。

昭和二十二年四月二十四日

新宗連中国総支部

以上の「決意宣言」からも窺えるように、四つのスローガンを柱として、宗教による人間の幸福、平和世界の実現がめざされている。

中国総支部の結成は、東京、近畿、北陸、北関東、中部、南九州、四国に次ぐもので、あと北九州、東北、北海道の三ブロックに設置されれば、総支部の全国ネットが完成することになる。新宗教結成以来十六年、ようやく教団本部のリーダーによるだけの宗教協力の場が、総支部の結成によって末端信徒にまで拡充されることになる。

宗教戦争の激化

総支部は二県以上にまたがって結成されている。のこる三ブロックの総支部が結成されると、たとえば広島市を例にとってみると、広島市の新宗連加盟の信者は、広島市協議会↓広島県協議会↓中国総支部↓新宗連事務局と全国の信徒は直接中央にパイプがつながることになる。

このような末端↓中央の組織体の拡充は、対創価学会意識が一つのモメントになっていることは疑えない。「決意宣言」にみられる「反道徳的な対抗を追放し」の反道徳的とは明らかに創価学会を指している。創価学会の政界進出に対する新宗連政治連合は昨年十二月に結成された。創価学会と表裏一体をなす

公明党が、本年一月の総選挙で公認候補三十二人をたて、うち二十五人を当選させた。これに対し新宗連政治連合は、全国で約百九十人の保守系候補を推せん、うち百六十人が当選した。また、今回の東京都知事選に自民、民社とともに松下候補の擁立は、公明党の政界進出に対する防衛的態度のあらわれである。公明党の政界進出は近代国家における「政教分離」の原則に逆行するものとして、有権者である信者が結束して、政治を正そうとする姿勢がみられる。

新宗連の活動方針は、総支部全国ネットの完成、各ブロックごとの県会議組織の充実に計って、タテとヨコの連帯を強化し、積極的に宗教協力をすすめていくという。

最近、世界救世教の新宗連脱退という事件とかかる末端組織との関係、公明党の都知事選で総選挙時とは一万数千票の後退などの事実は、全日仏の「仏教政治連盟」のあり方とともに、宗教と政治との関係に、きわめて大きな課題を提供している。

次回は妙智会教団を訪問する予定であります。

仏教と平和



「戦争はこりこりだ。誰れがなんといったってもういやだ」。これにすべての日本国民の声である。それなのに、ベトナムをはじめ、世界の情勢は、刻々変化し、戦争への危機や不満が深まるような気がする。

仏教は、戦争を排して、平和を願うことはいまさら云うまでもない。無量寿経には、

「仏の教化の及ぶところは、その徳によって世界は平和で、太陽や月の光も美わしく、災がなく、国は豊かで戦争などは起らず、人民は安らかに楽しく生活でき、礼儀道徳が重んぜられる」

と示されている。これは仏教の理想とするところであるが、また現実でもなければならぬ。もし現在このよう

になっていないならば、どうしてもこれを実現すること、仏教者は努力しなければならない。

ところが国が、「豊かで人民が安らかに平和である」とことは望ましいが、しかし、仏教のなによりも目的とすることは、生死の一大事だ。

現世のことも大切だが、それよりももっと重大な生死の一大事を解決しなければならない。現世の問題はそれが解決されてからだ。むしろ『国豊民安』という平和は、仏の自然の徳として、この問題が解決されるならばそこから自然にもたらされるものである、という人たちが多い。

しかし、わたしたちには、そう云いきれないものがある。戦争があつて、爆弾がおちて、何んの関係もない子供たちまでも虫けらのように殺されてもよい。これよりも生死の問題が大切だとは、わたしたちは、どうしても云いきれない。安っぽいヒューマニズムとわらわれるにちがいない。世俗の像をたちきって山にのぼる生活は、たしかに尊いものがある。しかし、そうしなければ、仏道修行ができず、生死一大事が解決できないとするならば、たとえわらわれても、わたしたちは諦めねばならない。それは、わたしたちの手のとどかない山のかたの生活だからであ

る。いや、ほとんどのすべての人たちにとって、はるかかなたの生活であるにちがいない。

しかし、これはわたしたちだけではなくして、法然上人もそうであった。

大乘仏教とは、世俗の像をたちきりえない、わたしたちのためのものなのである。大乘仏教は、在俗の生活のままに仏道修行のあることを教えている。遁世的な道ではなくして世俗的な生活のままで、仏道修行のあることを教えている。遁世的な道ではなくして世俗的な生活をするこのうちに出世の道があることを示してくれている。

わたしたちは、人間愛、世俗的な愛に生きながら仏の道を求めることができるのである。いや、むしろそれこそが、仏教の現実生活の在り方でなければならぬ。真俗が一体となつて行われることが、仏教者の典型的な在り方である。

平和は人類の悲願である。「国豊民安、兵才無用」とは仏教の願うところである。

しからば平和日、仏教から自然にあらわれるとして、そのままで果して平和はくるであらうか。

自然とは、そのまま放っておけばしぜんにそうなるとい

うことではない。「任運自然」とか「自然法乗」とは、そのまま運にまかせるとか、一切の努力を放棄してなりゆきに任せるということではない。

「自然法乗」とは必然の法則に従つてはたらく有様をいうのである。

けれども、人間の世界には、無量寿經に示されているように「自然有ることなし」であつて不合理があり、矛盾がある。だからこそ自然法乗の生活がなされるために、現実の世界にあつては、たたかわれなければならぬのである。そこに自然法乗の生活が現実にあつては、きわめて多くの迫害をうけなければならない理由があるのである。

わたしたちが、現実には平和をまもるためには、それをおびやかすものと闘わねばならない。

そのためには、歴史と社会の利害的法則をはっきり見きわめて、その法則に従つて闘わねばならない。

それなくして、現実の平和は来ないし、仏教の自然法乗の生活はない。

仏の道にいそしみつつ、平和への運動を闘うところ、平和への運動を展開しつつ仏道を求めるところ、そこに現在の仏教徒のただ一筋の道がある。

(一読者)

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 讃岐の国で —

高橋 良和

さしえ 小林 健造



さくらには少し早い三月二十六日のことであった。

法然上人は流罪の地である讃岐の国の垣飽島についたのである。京の山々がちがって、讃岐の山はまるで絵に画いたようななだらかさで、そして、やがて緑の芽がふき出し、うな春景色であった。

四国に上陸した法然上人について、「讃岐国子松庄におちつき給いけり。当庄の内生福寺という寺に伍して、無常のことはりをとぎ、念仏の行をすすめ給ければ、当国近国の男女、賁賤、化導にしたがふもの市のごとし」とつたえているので、ここでも上人の化導があったのである。

今とちがって昔この子松庄に赴くのに、丸龜の少し西よりの榜掘の井（かいぼりのいど）から行ったようである。

が、この榜掘の井という地名がまた珍らしいのである。

それは法然上人がこの地についたときに、百姓が水にめぐまれていないことを知って、舟の榜で井戸を掘ったところ、清水が湧いたといわれているが、凡そ上人の伝記にはこうした伝説などは稀であるのに、ただ一つ四国にこうしたつたえはなしが残っているのである。

この子松庄というのは、今の高松市仏生山町の法然寺であって、この寺の開創は徳川時代の水戸光圀の兄にあたる頼重公が法然上人の嫡居した生福寺が、天正年間に兵火に遭ったのを復興したといわれている。当時この子松庄には三福寺といわれて、生福寺、真福寺、清福寺という三つの寺があり、そのなかの生福寺は、かなり荒廃していたの



で、それを復興したのが法然寺であり、この御本尊には先の真福寺から影像を移したとつたえられているが、その御影は置文（おきぶみ）の御影といわれている。

この生福寺で上人は八カ月余りくらすので、ここで勢至菩薩の像を自らつくったのである。

もともとこの寺の本尊は阿弥陀如来一尊であったところ、観音、勢至をつくることになり、そのうちの勢至菩薩は、上人の本地仏であるところから、これをつくることになったと思うが、その勢至菩薩の像のうしろに、

わたしはもと勢至菩薩であって、それが生れ変わったのが、わたしである。今大衆を化導するためにこの道場にあらわれたのである。どうか大衆を導いて、極楽に往生せしめ給え、もし、これが成就しなければさとりは開かない。

とかたい決意の心を書き残している。

そのことについて不思議なことがいくつもあるが、その一つに、法然上人の弟子に直聖房（じきしょうぼう）という僧があった。

念仏の行をするために、紀州の熊野に参詣のために旅をしていたところ、法然上人が流罪になったというはなしを聞いて、「これは大変なことになった、なんとか四国に赴

いて上人をなぐさめたい」という心をおこしたのである。然しにわかに重病になって床に臥してしまったので、

これは困ったことになった、早く身体をなおしたい。

というので、熊野権現（くまのごんげん）に祈願したところ、この直聖房の枕元に熊野権現があらわれて、

あなたの病気はとても大病である。旅をするのはおぼつかないから、やめたほうがよいのではないか、法然上人は勢至菩薩の生れかわりであるから、心配しなくてもよい。

という夢をみたが、この夢のお告げでもわかるように、上人は勢至菩薩の生れかわりとしての考えがその弟子たちの間にもあり、上人自らもその信念で大衆教化に熱意をもったものと思われる。

長いようで短かい八カ月であった。

讃岐の山々も冬景色にかわる十二月になったのである。

この八カ月の間に法然上人にとっても大変なことが起こっているが、それは月輪殿の逝去である。

というのは、月輪の九条兼実公はいつも法然上人の身の心配をしていて、讃岐への流罪についても、なんとか自分の領地ということ、土佐の国への配流をここに改めたほどであったから、終始上人のことに心をくだいていた。

なんとか法然上人を、早く京都に返えしたい。

それがこの兼実公のねがいであった。

然し、世のなかのことはうまくゆかぬもので、兼実公も病には勝つことが出来ず、

わたしが死んでしまったあと、なんとか上人の罪をゆるしてあげてもらいたい。

と遺言して他界したのである。然しこうした心は、やがて皇室にも通じたのであろうか皇室のほうでも、自分の弟子が不始末をしたからといって、その師匠に罪をきせるのは気の毒なことである。ということで、最務四天王院の供養のときを機会に、大赦令（たいしゃれい）が出されて、承元元年十二月八日、この勅令が讃岐の上人のもとにとどけられた。法然上人の流罪はこれで終ったわけでないので、讃岐の国からはかえってよいが、京都へはまだ入ることをゆるさず、近畿に住居して、決して京都に入ってはいけない、ということであった。近畿に居ることは、やがて京都に住むことが出来るし、京の噂も聞くことが出来るのであるから、京都の門弟たちも、近畿なら、上人に遇うことが出来るというので、よろこんだようである。然し、法然上人には、わずか八カ月であるが、讃岐の国に住んだ親しさがあつたが、讃岐をあとに出発することになった。

武優和元

追放キリシタン

—その 2—

泉 湛 田 鶴

前年の正月頃には江戸幕府の中心人物である大久保忠隣と家康の側近本多正信、正純父子との対立はその極に達して、殿中で刃傷沙汰を起しかねない状態にまでなっていたともいわれた。

廿一日、早くも城地の受け取りが行われ、廿六日には小田原城は家康によって破壊を命じられてしまった。

忠隣に代って禁教の実施は、長崎奉行の長

谷川藤広の手によって、長崎を中心として、西九州一帯に渡って大々的に行われることになった。島津、細川、鍋島、松浦、寺沢、有馬、大村等の大名は、それぞれ兵士を出し部署を定めてキリシタン会堂を破壊し焼き払った。

こうして十一カ所の会堂が焼かれその跡には、その後二カ年間に一向宗の大光寺、光永寺、深宗寺、天台宗の本覚寺、禪宗の曹洞派の暗台寺などが建てられた。

正月廿六日、前田利常は、家康から右近と家臣の内藤如安に対する一つの命令を受けた。それによると、右近らに棄教するか流刑を受けるかの何れかを択べとの厳命であった。而も流刑の準備をするために二四時間以上は許されず、これ以上の命令を待たぬ金沢から追放し、身柄を京都所司代板倉勝重に引き渡せとの命が伝えられたのであった。

その翌七日の夕刻、六十を越した右近は一家全員、妻、娘、及十六才を頭に八才の末の孫をつれて二十六年間住みなれた金沢を立つて京に向った。

内藤も妻と四人の子供、四人の孫をつれて

出発したという。

若干の手まわり品を負うて雪におおわれた山路を歩み、真冬の寒さに身をふるわしながら十日もかかってやっと坂本に到着した。

右近が京都に入ったらキリシタンに擁せられて暴動を発することをそれたのか板倉勝重は一カ月近く彼等を坂本に滞在せしめた。

右近は二十才のとき高槻城主となったが、光秀を秀吉と共に攻めたのでそれ以来秀吉の寵を受け、次いで高槻の代りに明石を賜った。十才位の幼時からキリシタンの教をきいていた彼によって黒田孝高が改宗し、次いで諸生氏郷も信者となった。細川忠興の夫人がキリシタンとなったのは、忠興が右近から聞いた話を夫人にした結果からであるといわれている。

内藤は初め小西行長に仕え、文筆をもってきこえていた。支那の書物について豊富な知識を持っていた内藤は朝鮮と開戦する以前にも朝鮮に使いしているが、小西行長が明軍と相待峙したとき、明軍の提督李如松の処へ行って彼を詰問したこともあった。永祿の講和問題の時には秀吉の命により日本の使節とな

つて明軍の使者と共に北京に行き、兵部尚書（陸軍大臣）石星と堂々と押し問答を交わしたほどの人物であった。行長の姓をもらつて小西飛騨守と称していたので、明人は彼を小西飛と呼んでいた。

右近や京都附近の宣教師が七艘の船に分乗させられて長崎に到着したのは三月中旬であった。各派の宣教師や信者をおいおい長崎に送られてきた。この頃、京都や大坂で捕えられて改宗をあえてしない七十余人のキリシタンは幕府から流罪の宣告を受け、津軽の荒れた未開地の開拓に送られた。

長崎に送られた彼等は、四月から五月にかけて各派別の示威のための行列をしばしば行つたが、土着のキリシタンも加わつて大げさなものとなった。

ドミニコ会員の示威行列が五月九日の聖霊降臨の祝日に行われたが、この時は最も多数が加わつた。

白衣と黒い面覆をつけ、頭にはいばらの冠を戴き、手には十字架又は聖像を持った二十二人の女子が先頭に立った。次に八千人の男子が規律正しく三人ずつ続いて行進した。列の

中央にいるものは灯のついたローソクを持っていた。行列の最後には黒衣で包んだ大きな十字架が続いた。彼等はいくちして難を受けても意としない意気を示した。

八月幕府の上使が長崎に来て、内外の神父を海外に放逐すべしと命じた。

ポルトガル船の用意が出来ると九月二十四日、三艘の舟に六十二人の宣教師と五十人の神学生、それに多くのキリシタンを乗せた船がマカオに向つて長崎を出港した。

別のジャンク船二艘にイエズス会の宣教師廿三人、修道会の宣教師十五人、神学生十五人と右近や内藤とその家族、其他キリシタン百五十余人が分乗してマニラに向つた。

十月廿七日マニラに着すると、右近等は殉教者として盛大な歓迎を受けた。しかし右近は病を得て元和元年正月六日歿した。

追放者が出帆後、長崎では市内の天主堂を破壊し祭具を焼きすて、追放をまぬがれた者には改宗を迫つた。天主堂の跡には社寺を建て極力これを保護したのだった。

時を同じうして江戸の諸大名は、領内の留守家老に書を送つて、領内のキリシタンの検

挙に全力をつくすように命じた。

こんなふうには家康がキリシタン教徒をきびしく弾圧し致命的な打撃を与えずに置かれなかった原因は、その弊害を見のがすわけにはゆかなくなつたからであらう。

イスパニヤが布教に名をかって諸国を侵略して植民地にしていた事実があつたし、それ故に、異国人が布教を侵略の手段としたことを恐れたこと、又諸大名がキリシタン教徒とひそかに手を組んで強力となることも考えらるし、又異国の勢力と結びつくことも恐れねばならぬことであつた。或は教徒が、幕府政治に危険な行動をとることを恐れたことなどが考えられる。

信仰による団結がいかに手強いものであるかを家康は若い頃、三河一擲によつて手をつけたことであるから十分に知りぬいていたわけである。

当時キリシタンは七十五万もいると称されていたが、その頃の日本の総人口は千七百万から二千万と見積られていたから、キリシタンの数は決して少い数字ではなかつた。

家康としてはキリシタン布教を国土侵略の

謀略とまでは解しなかったとしても、新しい政治体制をととのえて行く上にとって大きな障礙とならねえかと思つたことであらう。

いふなれば、これまでの地方分権的な封建社会を崩して、將に中央集権的な強固な新しい体制をきずき民衆をその社会秩序の内に包束して行かねばならぬとき、この統一的な国家体制の確立には絶対的な服従がなによりも必要であつたし、これに努力しつつあつた家康

にとっては、キリシタンの自由主義は最も相入れぬものであつた。而も信仰の名のもとに、キリシタンは大名以下を教会の組織の下にますます強力に結集してゆく傾向があつたがこれは無視出来ぬ由々しき事柄であつた。

キリシタンは残酷な処刑をも少しもおそれず、むしろそれに身を投げて出して殉教するという怪奇な態度を示したし、又彼等相互の間には兄弟の仲も及ばぬほどの不思議な親密さと一致団結力があつたから、彼等が天下を悩ますに至るは明らかであると恐れをいだかしたものであらう。

キリシタンが日本に汎濫することは一大脅威と感じた幕府は諸大名に対して、キリシタ

ンを召しかかえることも居住することをも禁止したのであるから、これらのキリシタン武士は当然牢人の境遇に落ちて行き流浪の生活をせねばならなかつた。

右近等を海外追放にしたことは、いざ事が起れば大坂方に味方する恐れがあると思われキリシタンに対してその禍根を未然に防ぐために、断乎彈圧の拳に出たものではあるまいか。

家康は武將としての右近の真価を知りぬいてゐた。秀吉がおそれたほどの武略にたけてゐる勇將を、秀頼の味方に万一ついたならば味方の勝利は覚えないと恐れたのではあるまいか。十一才のとき洗礼を受けた右近は、利休門人の七哲の中に数えられていたほど茶に通じ又築城の名手であつたのみか、事実、家康は右近に千人の兵を与えれば、他のいかなる武將の下の一万人にも勝るであらうとまで感慨をもらしたともいわれてゐるほどの戦術家であつた。

右近等が受けた国外放逐という刑罰は、これまであつたためしなかつたほどの極刑であつた。

右近がマニラに向つて出帆した三日後に、右近を味方に誘引するために秀頼の教書をたずさえた使者が長崎に到着したのであつた。

その後、マニラの右近のもとにこの教書が届けられた。それには（御身は軍事に老練のこと故、總軍の総指揮を頼みなきこと、勝利の曉には日本全国の天主教徒に信仰をさしゆるすから一刻も早くその地を脱出して入城せられたい）との意味が認められてあつたという。

幕府は右近等を国外に放逐するだけでは不安に思つたのか、彼等の乗った船を海上で撃破してしまうため追撃船が跡を追つたが、曉に洋上に船の姿を見出せなかつたので手を空しくして引き帰してしまつた。

右近や如安等は自ら進んで殉教をねがつてゐた程であるから、秀頼の依頼を決して受けなかつたと思われるが、若し大坂の陣に加わつてゐたならば、右近は武將としての才幹を十分示す機会を得たし、又如安も得意の外交的手腕を発揮することが出来て、或はその後の日本史を全く異つた方向へ向けていたかも知れないとまでいわれている。

編集後記

△初夏、何か一生懸命していると、うつすら汗がにじむなにかにも、日蔭に入ると新緑の香りをのせた風が吹きぬけ、大変気持ちよい頃々です。
△開宗八百年御忌を目指し宗内各方面ではいろいろな記念行事・事業が計画されている。中でも「浄土宗辞典」の編纂は遠大な計画のもとに着々とされている発刊が待ちどろしいところだ。

△大本山鎌倉光明寺でもこの機会に本山・開山堂等諸堂の屋根の修理及び光明寺会館建設を計画している。莫大な費用のかかる由、皆様のバックアップを望みます。
△一方この光明寺ではじめた会席料理は仲々好評のようである。整備された庭園をながめながらの食事もおつなもの。最近最近郊の婦人会等団体の申込みもあるとのこと、一度行つてごらんになつてはいかがでしょう。

△昨年より発行をみた「浄土宗新聞」永年の念願がかない、関係諸氏は満足の星、毎月檀信徒に配布している寺院も相当数ある由、うまく利用したいものです。
△一月号より連載している黄檗蘭若流家元三浦純亭氏の「お茶をいしく」今まで本誌に見られなかったユニークなものとして仲々好評です。十二月号まで連載の予定、益々その健筆がまたれるところ。です。
△藤井正雄氏の「新興教団探訪」も仲々期を得た企画と、質問の葉書を度々いただきます。皆様の近くで是非紹介したい新興教団がありましたら御一報下さい。

△東京での水曜会という若手の研究会では、選文集を輪読しているが、いつも熱がこもつて、夜のふけるのも忘れる程のこと、この力が明日の浄土を基づく礎となるものでしょう。
△大正大学では四百余名の新入生を迎え、新生の意気に燃えている。一方面的に仏教大学では新校舎も整備され、大発展の途上にある。共にこれからの宗門を背負う若人研鑽の中心である。まことによろこばしいかぎりである。
△読者皆様の投稿を心待ちに致しております。いかような原稿でも結構です。本会までお送り下さい。又、その他お気付けの点がありますれば、御一報下さい。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年五月二十五日 印刷

昭和四十二年六月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六
発行所 法然上人鎌仰会

電話東京二六二二五九四四番

郵便東京八二一八七番

不屈な精神力

重源上人

東大寺俊乗堂藏



治承四年（一一八〇）東大寺は戦乱にまきこまれ、兵火をあびるに至った。俊乗房重源は、このとき、東大寺再興のために大勧進職に任ぜられた。重源は十数年間、諸国を歩き、ついに建久六年落慶供養を行なうことができた。その後、重源は七十歳で寂したと伝えられている。十数年の勧進とひとくちに言うことができて、不自由な旅の時代にとってはたいへんな努力と精神力を要したことであろう。法然上人とのであっても重要であろう。

鎌倉時代の肖像彫刻の代表的傑作として知られる、この像には重源が史実に残した伝説がいきいきとして映じているといえよう。静かな眼もとにも、その底にはなみなみならない自律の精神がこめられているように思える。底光りする眼こそ、眠っているようにみえながら、いつでも働きますことができる求道者の生命が躍動しているものである。口もとのまがりぐあいには、いかなる難事にもたえることができるという不屈の闘志が秘められていると誰れしもが思うであろう。俊乗堂にまつられているこの像は決して大きなものではないのに、お堂いっばいとても大きく感じられたのは、重源のスケールの大きさによるものではなかったのかと思ひ返されるのである。

（石上善応）

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版)	安居香山 著	価30・〒15
浄土宗のおしえ (四版)	宮林昭彦 著	価30・〒15
ご法語のしおり 葵ぐさ	村瀬秀雄 著	価15・〒25
諸仏の戒め	村瀬秀雄 著	価5・〒15
浄土宗のおつとめ<経本>	村瀬秀雄 著	価90・〒35
一枚起請文をめぐる	村瀬秀雄 著	価120・〒35
選択集私解	竹中信常 著	価120・〒35
ものいう石	竹中信常 著	価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187

浄土

第三十三卷

第六号

定価金六拾円 (送料六円)

施本

おぼん

一部 十円
実費

よんで やさしく・みて たのしく
おくって よろこばれる 小冊子

内容……おぼんをむかえて／目連さまのなげき／母をすくうには／おせがきのはなし／ほか……10ページ

見本は切手二十五円を鑽仰会あるいは大道社へお送り下さい。予約はお早目に納期もかならずおしらせ下さい。

発売元

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
大道社

TEL (二六二) 五九四四
振替 東京 八二四七